

「戦後社会制度とキリスト教 1945-60」研究会 赤岩栄と日本のキリスト教界

寒河江 健

はじめに

本論文では、日本基督教団の牧師として活動しつつ共産主義を肯定的に受け止め、ついには日本共産党への入党宣言を行なった赤岩栄の言説に対して彼の属する日本基督教団や日本のキリスト教界がどのような反応を見せたのかを考察する。

第1章 共産党入党決意表明まで

(1) 赤岩栄のマルクス主義研究

赤岩栄は東京神学社を卒業後、日本基督教会佐渡伝道所に赴任するが、1931年高倉徳太郎の要請で東京に異動して高倉主宰の『福音と現代』の編集を担当することとなり、同時に高倉の要請でマルクス主義について研究し『福音と現代』に「マルクス主義と基督教」（『福音と現代』1931年4月1日）と「マルクス主義と基督教（二）」（『福音と現代』1931年6月1日）を寄稿している。その中で赤岩は多くの青年たちがマルクス主義の旗下に集まることによってあらゆる思想的領域を克服し、力強くマルクス主義的世界観を戦おうと努力していることを評価しつつ、一方でマルクス主義者が否定しているキリスト教とは観念的なキリスト教であると述べる。赤岩は真のキリスト教とはカルヴァンの「余は神の知識をば、単に神が存在するということの理解であるとは思惟しない」という立場、すなわち神の知識や神への信仰は人間の義務や実践的行動と結び付くものだと言語する。

(2) 共産主義に対する見解 ～「キリスト新聞」紙上より～

その後赤岩の共産主義に対する考えが現れるのはキリスト新聞である。「信仰による実践 - 共産主義とキリスト教 -」（『キリスト新聞』1947年4月26日）の中で赤岩が共産主義とキリスト教に述べた内容を見ていく。要点は以下の4点である。①共産主義者を「直ちに神の敵であるとは考へないで、ただイエス・キリストを知らない彼等の無知として極力気の毒に思ひ、出来る限り、キリストを宣伝へることが肝要ではなからうか。」②とはいえ共産主義者は簡単には福音を受け

入れないであろう。その原因は「私たちの側にないかといふことを深く反省してみる必要がある。」今日の私たちは「自分の思想や立場をキリスト教によつて擁護したりただ気分の上でだけ人類を愛して、真に困窮した人々を見棄てていたりしないであらうか。」③この人間を愛することは単なる慈善事業ではなく「もつと社会をよくするためには、正しい政治が確立されなければならないことに目覚めて、どれだけ真剣に腐つた今日の政治の浄化のために苦しみ戦っているであらうか。」「共産主義と、キリスト教とは……共に、よりよき社会の実現のために戦うことにをいて、よき競争者でありたいと思ふ。」④私は「日本の共産主義幹部の人達が」「社会を改革する道はマルクス主義以外にはないと確信し」、「牢獄に十何年も入れられながら、その確信を貫き通したこと」に驚嘆している。故に過去の弾圧に耐えてきた共産主義幹部を想うとき、「キリスト者の弱腰と、場合によつては無節操を慚愧せざるを得ない。」ドイツのニーメラーもまた、「ナチ・ドイツのアンテイクリストと戦つて、その信仰告白を守り通したではないか。」共産主義によって「私たちは真の信仰に生きているか否かが吟味される」。「社会を逃避する生活は、真の信仰生活ではない」。今こそ共産主義によって「真に福音的信仰に目覚めて」立とうと勧めている。

(3) 平山照次との激突

i. 第二回全国青年指導者修養会

赤岩は日本基督教団東京教区の青年部に所属し、1948年に教団主催の第二回全国青年指導者修養会に参加した。『教団新報』（1948年9月10日）には1948年6月29日から7月1日まで行われた第二回全国青年指導者修養会の報告（文責：大阪教区奈良信・福島稜）が掲載されている。それによると第1分団で平山照次（東京山手教会牧師）が「信仰と職業」という題で話し、「『資本主義、社会主義、共産主義等々に対するキリスト者の態度如何にあるべきか』の問」いに対して「信仰とイズムがバラバラではあり得ないから、キリストは須くキリスト者独自のイズムを持つべきではないか」という話に発展した。分団での論議の後に総合協議が赤岩の司会で行われ、ここで赤岩と平山が激突した¹⁾。

ii. キリスト新聞での論争

第二回全国青年指導者修養会の後、『キリスト新聞』（1948年8月7日）に「基督教とマルキシズムをめぐる二つの公開状、平山照次『二主に兼ね仕えず』、赤岩

栄『神のものは神にカイザルのものはカイザルに』、森幹郎『取材記者として』（『キリスト新聞』1948年8月7日）が掲載された。経緯としては①キリスト新聞社による第二回全国青年指導者修養会の報告記事を受けて平山照次が第一の公開状をキリスト新聞に寄せる。②そこでキリスト新聞社は赤岩栄にその応答を求め第二の公開状を得て8月7日の『キリスト新聞』に同時公開する。③赤岩による第二の公開状が出されることを知らなかった平山は第三の公開状（『キリスト新聞』8月14日に掲載）をキリスト新聞に送るという次第である。

平山は第一の公開状「二主に兼ね仕えず」の中で第二回全国青年指導者修養会は「『信仰はキリスト、実践はマルクス』という赤岩テーゼを圧倒的に否定」したのであり、「赤岩栄牧師の立場」に対して「同情的言辭が多かつたことはキリスト者の対マルクス主義思想を現すものである」とキリスト新聞が報道しているのは「事実無根どころか、実は却つて逆報道であり」、「教団青年部が赤岩氏の容共理論を手放しで認めているかの如き記事は事実と逆であつて実際は修養会全体の空気は圧倒的に反共産主義的であつた」と主張した。また平山は「日本キリスト教の前途のため主義を陰しく否定する教団青年部の空気に対し翌朝教区青年部長会閉会后同氏は青年部よりの退陣を表明された事実である（帰京後又翻意留任を申出られた由だが）」と内部事情も洩らしている。

対して赤岩は「神のものは神にカイザルのものはカイザルに」と題した第二の公開状の中でこのように応答している。「神は永遠であり、カイザルは時間であり」、「その意味で僕にとっては唯一の主は、人となり給うた神、あのイエス・キリストである、私は決してマルクスを私の主とはしていない、ただ彼は社会に対して私を開眼してくれた師に過ぎないのだ」。さらに赤岩は「平山君には、この永遠と時間との質的区別が分つていないのだ」と続け、「永遠と時間」には「質的区別」があり、福音は永遠であるが「この福音を聞く僕らの場所は这个世界であり、この社会である故に僕らは这个世界をこの社会をそのある法則において正しく認識することが必要であり、この認識こそ、地動説や進化論が社会科学の承認なのであつて、この承認によつて僕らの福音的信仰は決して、危うくされない」と主張している。

また赤岩は「共産主義者に対して責任を感じず、彼らは正しい意味で福音を聞いたことがない」。だから「自分の独断で、神を否定し、そこからまた誤つた考えを引き出しているのではないか」との見解を述べ、「僕は彼らに福音を語る責任を主から委託されている」。「今日の教会こそ殆んど労働階級を閉め出してしまつて

いるのだから、僕は教会から閉め出されたこの階級に対して、教会にあつて責任を感じるので」と主張している。

最後に赤岩は平山が先の公開状で明かした赤岩の青年部からの退陣という内部事情にも触れ、「僕は青年部が平山イズム一本で行くなら、青年部を脱退するが外ないことを表明した、しかし翻意留任を申出たということは、これも平山君のデマである、僕は青年部が平山イズムよりももつと広い線でいくつもりなら教団のため、また青年部のため、………留る意志のあることを表面下だけである」と弁明している。

二つの公開状が『キリスト新聞』に掲載された後、平山は『キリスト新聞』8月14日号に「一切を棄ててイエスに－赤岩栄君の駁論に答う－」という第三の公開状を寄せた。そこで平山は「教団青年部修養会の誤報を訂正するための拙稿が、赤岩君の手に渡つて、返答にもならない見当外れの悪罵に満ちた反駁文とともに公開状の形で前号に掲載された」。「赤岩君は塩原で、共産主義陣営内で実践すると言明し、「共産主義の真理性を認めずこれを実践しないものは………レベルの低い基督者」であり、「社会をそのある法則において認識したものこそ進歩的基督者であり」、「マルクスにその法則を『開眼』された前進的基督者」と主張するのに対して平山は「科学的知性を重んずればこそマルキシズムの偶像性を否定」し、「共産主義者労働者への伝道はよいが、カイザルの世界、時間の世界のあの唯物史観を、政治革命を、労働者独裁を、そしてボルシエヴィズムのあの流血行為を－冗談ぢやない－実践するということになるらしい」と語った。

また「東北のD牧師は『赤岩君が戦時中僕らの所でものすごく右翼的な事を話して困つた』と私に語ったが、赤岩君が昨春教団で中食を取り乍ら、共産党入党申込をした経緯を我々に話した事と思ひ合せ、これが『福音の自由?』だなどと思われされた」と再び論旨とは関係ないことを語っている。

その後1948年10月1日の「教団新報」に日本基督教団青年部常任委員会が「赤岩栄 平山照次 両氏の公開状に就て」の一文を公表する。キリスト新聞上に赤岩、平山両氏の公開状が発表されたことに伴い、青年部常任委員会の所信を表明するものである。ここでは赤岩の立場に対して「福音宣教の立場からマルキシズムに対して如何なる態度をとつて行くかの見解に距離が生じていると思ふ」と記され、「この問題は現下わが教会に課せられている重要な課題の一つであつて、われわれも慎重に検討しつつある」。「平山氏の第二の公開状中には赤岩氏個人の事について極めて立ち入つて言及されているが、こういう事は事実でない（青年部長加藤

亮一)」とまとめている。

第2章 共産党入党決意表明とその後

(1) 共産党入党決意表明

赤岩栄は日本基督教団上原教会の牧師在任中の1949年1月23日に行われた第24回衆議院議員総選挙において日本共産党から立候補していた風早八十二を応援して街頭に立った。また1949年1月21日の「アカハタ」には「風早さんの応援に赤岩牧師起つ、共産党入党の決意示す」という記者との対談記事が掲載された。この2つの出来事が彼の勤める上原教会並びに彼の所属する日本基督教団、さらには日本のキリスト教界において大きな問題として広がっていく。

(2) 上原教会の反応 一千歳船橋教会の設立

ここでは赤岩が牧師として勤めていた上原教会の信徒たちが彼の共産党入党決意表明をどのように受け止め、また赤岩自身がどう説明したかを見ていく。なお資料として当時上原教会の信徒であった竹本哲子を書いた『私の出エジプトー上原教会脱出記』を主に用いる。

竹本哲子は元上原教会員でありクリスチャンの家に生まれ育ちキリスト教主義の学校に学ぶ。その後結婚し1936年に上原教会の斜め前に家を建てたことがきっかけで上原教会に通うことになった。1949年の赤岩栄共産党入党決意宣言を契機に20数名の信徒と共に上原教会を離れて家庭集會を持ち、やがて西原教会（現・千歳船橋教会。上原教会員であった山下宅で教会脱出組20数名による礼拝が続けられた。山下の家が代々木上原駅北側の旧・西原町934にあったためにそう名付けられた。その後世田谷区経堂町の愛珠幼稚園で2年近く礼拝を守り、やがて千歳船橋へと移った。）を設立し、その信徒となった。竹本は1982年に千歳船橋教会員からの勧めもあり当時の記憶や日記などを頼りに『私の出エジプトー上原教会脱出記』（日本之薔薇出版社、1982年）を書き上げた。

竹本は昭和11（1936）年に教会の斜め前に家を建てたことがきっかけではじめて上原教会の門をくぐった時の印象を「他の教会と違って“何か原始キリスト教”的な感じがするのを気に入った」と記す。当時の上原教会は若い、貧しい人たちが多く、すべてを教会に捧げ、教会第一に生活していた。「結婚も、就職も牧師に相談しなければならなかった」と回想している。竹本は11年間礼拝・祈祷会を

守り、また修養会にも参加するなど教会生活を過ごした。赤岩はよく「『おのが腹もて神としている』といって現代のバリサイ人、即ちクリスチャン達を攻撃」した。竹本には赤岩が偽善的な、謙遜な態度で、それでいて心の中でお高くとまっているような連中を憎んでいたように感じ、昔から教会の偽善的な空気を嫌っていた彼女ははじめて自分に向いた教会を発見した思いを感じていた。

竹本は昭和23（1948年）年頃から赤岩の説教の内容が変わってきたことを感じる。かつて信仰のみを強調し政治嫌いであった赤岩が礼拝で「キリスト者が社会に目を向けなければいけない」という話ばかりし、共産党をほめたり社会党をけなしたり政治の批判をするようになった。赤岩の説教の変化は他の教会員も感じており、「先生は百八十度変わっておしまいになった。今まで先生は信仰とは神の側から与えられる者、我々はその信仰によってのみ義とされる、とおっしゃって、社会事業や愛のわざを認めていらっしやらなかったのに……」と言う人もいた。ちょうどこの年、赤岩の娘が家出をして共産党員の青年と同棲しているという噂話が教会員の中でささやかれるようになる。それが事実なのか定かではないが、赤岩はついに1949年に礼拝の説教で良いサマリア人の話をして共産党をほめ、「愛の実践は、今日に於て共産党入党より外に方法がない」と語り教会の中で共産党入党の決意を宣言した。

赤岩は戦前信仰のみということを徹底して教育していたが、戦争が終わり世の中が変わるとその態度を変えて「どこかの教会の婦人会はおまんじゅうを作って売って儲けたそう。この婦人会もそんなことでもやったらどうだ……」などと言うようになった。竹本は赤岩が戦前には礼拝、祈祷会の厳守、修養会への参加、伝道集会のピラ配りなどを徹底させ、バザーをしたりお菓子を作ったりするような世俗的なことは話すだけで怒っていたため、赤岩の変化に驚きを隠せなかった。

共産党入党決意宣言後も赤岩は礼拝説教の中で共産党をほめることをやめず、それが教会内外で大きな波紋を呼んだために1949年2月に教会員全体会議が開かれることとなり赤岩の共産党入党決意についての説明が行われることとなった。その会議において上原教会に転会してまだ1年経っていないものの、赤岩に一目置かれていた隅谷三喜男（当時東京大学助教授）が赤岩の共産党入党決意を批判し、会議は混乱したまま結論が出ずに終わった。3月には婦人会有志が集まり赤岩のプラス面、マイナス面について論じ合うこととなった。

婦人会の人々は赤岩の人間性には満足していなかったものの彼のすぐれた才能と信仰は認めていた。しかしついに赤岩の態度に我慢できなくなり教会を脱出し

た20人ほどの人たちが西原にある教会員の山下家で家庭集会を守ることとなった。『千歳船橋教会50年史I』では「教会の設立」の項目で以下のように説明されている。「49年1月の総選挙に当って、赤岩栄牧師が共産党入党を宣言するという事件が生じ、キリスト教界に大きな衝撃を与えるとともに、教会内部においてもこれを契機として従来からの問題が拡大され深刻化し、教会員の熱心な尽力にもかかわらず事態は好転せず、同年4月末に開かれた教会総会においてついに破局に立ち至り、婦人会員を中心として教会員の半数近くは、〈中略〉ついに意を決して上原教会を脱退するに至ったのである。〈中略〉離脱者の一部は他教会に赴き、一部は教会を捨て去ることとなったが、約20名のものは〈中略〉5月第1日曜からささやかな集会を始めるに至った。集会はその後日曜礼拝を山下姉宅(出席者平均20名)において祈祷会を竹本姉宅(出席者平均10名)において引き続き開いた」(3ページ)。

なお『日本キリスト教団上原教会の歩み 1928～1997』では1950年に上原教会の分裂並びに5月に約20名の教会員が上原教会から脱退しその主翼が千歳船橋教会を設立していったことを報告している。上原教会の人事異動という点で考えればそれで間違いはないが、実際には1949年の赤岩の共産党入党決意宣言の時点で決定的な分裂が生じており、その後上原教会員20数名によって西原町の山下宅で礼拝が行われ、また竹本宅で祈祷会も守られその約1年後に西原教会の教師就任式、役員就任式、教会設立の宣言などが行われていることを確認したい。

第3章 『キリスト教脱出記』 出版を巡る出来事

(1) 『キリスト教脱出記』の出版

赤岩は日本共産党への入党宣言を境に日本基督教団の要職を辞し、教団から距離を置くようになっていたが、1964年に『キリスト教脱出記』を出版した。この本の反響は大きく翌1965年に『キリスト教脱出記』における言説が日本基督教団の許しうる限度を超えているとの声が大きくなり再び赤岩の言説が教団内で取り上げられることとなった。

(2) 佐藤敏夫による赤岩栄『キリスト教脱出記』評

赤岩栄の『キリスト教脱出記』出版に伴い基督教新報には赤岩は信仰を捨てたのか、赤岩の著書は教団の信仰の限界を越えた、この際信仰内容を厳密に論じ合

え等の意見が寄せられたため、基督教新報編集部は東京神学大学助教授の佐藤敏夫に赤岩との対談の場を用意し、対談の内容を佐藤に解説の形で新報に掲載した（佐藤敏夫「赤岩牧師と対談して」『基督教新報』第3453号、1965年4月3日）。

佐藤は解説のはじめに、赤岩のキリスト教脱出記において極めて明らかな点は、赤岩が「伝統的なキリスト教信仰から脱却しようとしている」ことだと語る。この点に関しては議論の余地がないことだが、一方で不明瞭なのは伝統的キリスト教から脱却してどこに行こうとしているのかという点だという。

佐藤は19世紀から20世紀にかけて伝統的キリスト教からの脱出を試みたものとし大別して3つの場合を以下のようにまとめている。第一は伝統的キリスト教から脱却しようとするが、なんらかのしかたでキリスト教の信仰を現代に生かそうとする自由主義神学の立場。第二は伝統的キリスト教からの脱出が同時に基督教信仰の精算を意味するシュトラウス、バウアー、フォイエルバッハなどの立場。これらは結局唯物論に赴く。第三は第二の立場をさらに徹底してキリスト教以前の古代ギリシアの世界に帰ろうとするニーチェやカール・レーヴィットなどの立場である。

佐藤はまず赤岩は「第一の場合に属する人ではない」とし、彼がキリスト教から脱出することで得た利益として「原罪や罪に対する宗教的罰の威嚇から、完全に自由にされた」ことを挙げている点に第三の立場との共通点を見出している。赤岩はニーチェのように牧師の子どもとして生まれた。しかし赤岩はニーチェのように基督教以前の古代ギリシアに帰ろうとしているかと言えばそうではなく、キリストから脱出しようとするがイエスには固着しているという。

また赤岩はキリスト教から脱出することの二つ目の利益としてキリスト教が「神話的な架空なもの」であり「不可謬的なものではない」ことを知ったことを挙げたと言う。そしてこの点から佐藤は赤岩の根本動機として伝統的キリスト教の神話的架空性の暴露以上に「人間を抑圧する伝統的キリスト教から人間を解放することにある」のではないかと考察している。

第8回常議員会において「赤岩牧師の言説に関する」特別委員会は赤岩氏の『キリスト教脱出記』を聖書学的、神学的に論評し、神学的討論への道を開くことが必要であるとの意見を提出し、これを教団新報に掲載した（佐藤敏夫「『キリスト教脱出記』について」『教団新報』第3484号、1966年7月16日・第3485号、1966年8月6日）。

佐藤はまず、「キリスト教脱出記」という題から赤岩はキリスト者であることを

やめたのかという印象を持つ人もいるが、本書を読み、また赤岩本人から話を聞いた限りにおいてそうではないと語る。赤岩は日本基督教団の牧師を辞める意志はなく、したがってキリスト教の牧師を辞める意志もない。彼は従来の伝統的キリスト教の信仰内容を激しく批判して破壊しようと試みるが、キリスト教の牧師は辞めないという。では伝統的キリスト教を破壊してどこに向かうかといえば、キリストから脱出してイエスに向かおうとする。

キリストからイエスへの意向は神学史的に見ると18世紀から19世紀に見られた立場であり、ドグマの衣をまとったキリストではなくかつてのありのままのイエスを探究する立場である。その後20世紀にブルトマン学派は史実的イエスの復元は不可能であるとし、ケリユグマのキリストの探求へと向かう。赤岩もブルトマン学派同様史実的イエスの復元可能性については懐疑的だが、ケリユグマのキリスト探究には向かわず史実的イエスを取り上げ、極めて限定された範囲内でイエスの教説だけでなく人格や事件に関する史実はその痕跡を取り出しうると主張する。

赤岩は伝統的キリスト教の破壊を試みイエスのヒューマニズムに帰着するが、それは結局のところ18世紀から19世紀にかけてのイエスの宗教と同じくこれまでのキリスト教が持っていた豊かさや深さのない貧弱な内容になってしまっている。特に赤岩はイエスにおける終末論的要素を認めず、終末論抜きのキリスト教を考えているが、これは現代聖書学の見解とも違う独自の立場である。

赤岩のヒューマニズムにおける問題点は、ただ人間復権というだけで、その人間がどのようなものとしてとらえられているのか明らかではないことであるため、今後その点について筆を進めることが期待されると佐藤は記している。

(3) 日本のキリスト教界の反応

続いてこの項では『教団新報』読者の投稿欄である「時のことば」に見る『キリスト教脱出記』に対する反応を確認していく。

まず隅田川伝道所の牧師であった伊藤之雄は赤岩の『キリスト教脱出記』出版によって起こった「赤岩問題」に対して、『教団新報』の投稿欄「時のことば」に日本基督教団信仰告白（以下「教団信仰告白」とする）のことや『キリスト教脱出記』の意図について以下のように投稿している（『教団新報』1966年7月16日）。

まず教団信仰告白は「既成の各信条と各教派の信仰の集中的集成であることに意義があるが、私たちの将来あるべき信仰のビジョンの表現からは、程遠いもの

である」と述べる。例えば現代において使徒信条の神話的表現は字義通りに受け入れることはできないものであり、仮にそれを受け入れても何らの人格的信仰を生じさせないとし、「古代的また中世的言語と思考法は、今日新しい転換を見るのではなくては、その精神自体の窒息を免れない」と語る。そして赤岩が『キリスト教脱出記』において否定しているのは「魔術的中世的キリスト教」であり、それはすでに前世紀においてマルクスやフォイエルバッハが批判した宗教性であると指摘する。そして赤岩の批判は今日の教会がいまだに封建的な宗教観に大きく支配されている限り大いに価値を持つとし、赤岩はマルキシズム哲学に対する応答としてのキリスト教独自の立場を明らかにするための努力を傾けていると語る。

また赤岩の思想の特徴としてイエスの虐げられている人々へのヒューマンスティックな生涯に真理を見出そうとすることを挙げ、「イエスの実存的ヒューマンスティックが氏の中心的思想である」とする一方で赤岩が「イエスをいきなり絶対的の神としキリストと断定し教える、人間性を軽んずるオーソドックスの教義に反発するあまり、どこまでもキリストという名称を拒む」としている。そして赤岩の「表面上の現象的な『無神論』には正しい契機があり、『脱出記』以前の氏の実存的・社会的信仰表現を知る者は、『脱出記』が氏の思想表現としては、はなはだ不十分であることを認める」と述べる。

続いて和歌山県にある御坊教会牧師の岡田正夫が『教団新報』（1966年8月6日）にて赤岩の言説に関する問題がようやく教団常議員会や信仰職制委員会において問題になっていることに触れ、赤岩の言説をめぐって「露出してくる本質的問題」すなわち「教団のもつ、聖書解釈（聖書の読み方）の問題」並びに「教団の教会論」のほうが先決問題であると語る。そして「旧新約聖書は神の靈感によりて成り教会の拠るべき唯一の正典なり」と告白する教団に対して聖書の非神話化論や様式史的、編集史的研究に「健全な正しい批判をなしてその進化を明らかに」し、「聖書を『神の靈感によりて成る教会の拠るべき唯一の正典』として読みとる読み方（聖書解釈の福音的立場）を鮮明に示すべきである」と主張する。

また教団の教会論に対して赤岩は「教会を『イエスにある交わり（協同体）』と解釈し、教団もそのような群れであると受け取っている」が、教団信仰告白が「教会は主キリストの体にして、恵みにより召されたる者の集いなり」と告白していることを述べ、さらには教団が教会の体質改善の前提として「教会を教会たらしめる四条件」として（1）霊的条件（2）信条的条件（3）組織的条件（4）物的条件が挙げられているとし、教団の教会観が示されるならば赤岩の教会観と異なる

者であることが明らかになっている。

さらに岡田は1966年10月21日から26日にかけて開催された第14回日本基督教団総会後、さらに赤岩死去後の『教団新報』（1966年12月3日）に「誤伝や問い合わせに答えて－赤岩問題－」と題して投稿し、その意図として去る教団総会において常議員会報告13「赤岩栄牧師の言説に関する件」について自身が発言したことを受けて、「いろいろな詰問や問い合わせを受け」たため公開的に答えるためという目的を記している。そこでは特に教団総会直前の常議員会で承認決定された「赤岩牧師が自発的に教団教師を自信するように勧告する」という決議をなす前に、当面の責任者数名が誠意を尽くして赤岩とよく話し合うことを教団総会の場で要望したとの内容が記されている。岡田は9月29日に赤岩と会い、本人から「教団から脱退しないという三つの理由」を聞いたと語り、その3つの理由を簡潔に記している。その理由の中で最初に記されている理由は教団信仰告白の問題で、そもそも教団成立時に教団信仰告白は存在しておらず、それが制定された時には赤岩はキリスト教教義に疑義を持ち教団信仰告白に賛意を持たず今日に至っているため、そもそも「信仰告白に対する度ははずれた解釈」という理由で教団から除名されることは承服できないことである。その他に2、自閉的なキリスト教からは脱却しようと思うが開いていくキリスト教から離れるものではないこと、3、現在の教団に属する教職者の中に自分の考えと同じようなものが相当数いることを挙げている。

(4) 赤岩死後

1966年11月28日に赤岩栄が死去した後、赤岩の言説によって提示された問題、今後の課題を改めて考えるために座談会が開催された。出席者は北森嘉藏（東京神学大学教授）、陶山義雄（明治学院高校教諭）、佐藤敏夫（東京神学大学助教授）、菊池吉弥（日本基督教団伝道委員長）の4名である。なお括弧内の役職はキリスト新聞に記載されているものをそのまま記した。キリスト新聞は1967年5月20日、5月27日、6月3日、6月10日、6月17日と5回に渡って座談会「『赤岩言動』の問題点を探る」を掲載している。

座談会ではまず代々木上原教会の元牧師で赤岩と関係の深い陶山が口火を切り、赤岩がヒューマニズムという言葉で言い表したかった歴史のイエスは信仰のイエスではないということになるだろうと述べ、どんなに苦労してもヒューマニズムが歴史のイエスになり得るのかどうかという問題が残ったと語る。また陶山は赤

岩が日本基督教団の制度、儀式を批判したことにも触れ、特に赤岩は自らの聖書理解から信仰告白と礼典儀礼を問題提起したと語る。

日本基督教団信仰告白への問題提起に対して教団伝道委員長であった菊池は、赤岩がイエスは肯定しキリストは否定するという立場をとる場合、信仰団体としてイエスをキリストとして告白する教会からすればキリスト教からの脱出、教団の外に出たと考えざるを得ないと自らの考えを述べるが、一方でイエスに固着していることを理由に「クリスチャン」であることまでは否定しないと語る。あくまで教団から言説を調査され、「度はずれた解釈」という結論を出されたのだから赤岩自身、自分の言っていることに責任を持ち、とるべき処置を取らなければならないと述べる。

これに対して陶山は、そもそも赤岩は教団信仰告白を認めない立場にあったためにその解釈の限度というものも自分には当てはまらない立場を取ったと言い、それでは一体どうして信仰告白を持っている教会に残らなければいけなかったのかと北森が疑問視している。そして改めて信仰告白の解釈には自由がある一方で、解釈ならどんな解釈でも良いということではなく、解釈の限度の問題があり根本問題として教団が信条主義的な方向に行こうとしているのかしていないのか、信条の位置がはっきりしないことが挙げられている。北森は今回のいわゆる「赤岩問題」を契機に信仰告白の位置付けについての目処を立てつける契機が与えられたと語り、赤岩が残した問題について今後の教会の宣教という観点から積極的に考えなければならないと結んでいる。

まとめ

以上のように赤岩の言説を巡って展開された日本基督教団ならびにキリスト教界の反応を考察した。そこには赤岩の言説を全て否定するもの、部分的に否定して赤岩の言説の意義を一定程度認めるもの、ほぼ肯定するものなど様々な反応があったが、特に赤岩に関する議論を通して日本基督教団信仰告白の解釈の限度、聖書解釈という課題が露見することとなった。

〈註〉

¹ 詳細は寒江江健「赤岩栄と日本基督教団」『富坂キリスト教センター紀要』第13号10号、pp.108-109を参照。

〈参考文献〉

『福音と現代』

『キリスト新聞』

『教団新報』

「アカハタ」

竹本哲子 『私の出エジプトー上原教会脱出記』 日本之薔薇出版社、1982

『千歳船橋教会 50年史 I』

『日本キリスト教団上原教会の歩み 1928～1997』

寒河江健 「赤岩栄と日本基督教団」『富坂キリスト教センター紀要』 第13号10号、2023年3月

